施設型採種園における種子生産技術の確立

【研究概要】

東京都では、採種園外花粉の混入やカメムシによる球果への加害の影響を低減するため、既存の少花粉スギおよび少花粉ヒノキ採種園にビニールハウスを建て施設型採種園へと改良を行った。しかし、施設型採種園では交配時期における施設の閉鎖により、採種木への高温障害のリスクが高まる。そこで、閉鎖時期を短くするため、施設内採種木の開花状況を把握する試験を実施した。

（１）スギ施設型採種園では、多くの品種で雌花の珠孔液確認期が屋外型採種園に比べて早く始まり、その期間は１週間程度から２週間程度と品種によって異なる。雄花は、雌花よりやや遅れて開花し、雌花が閉花した以降も花粉が飛散する。

（２）ヒノキ施設型採種園では、雌花の珠孔液確認期が屋外型採種園に比べて約２週間早く始まるとともに、珠孔液確認期間が２倍以上長い。花粉の効果的な散布方法を確立することで、施設の閉鎖期間を短くすることが可能である。